

所報

佐賀県
教育センター

No.21



ミネルバ通信

平成14年1月21日

C O N T E N T S

特集.....	2 ~ 3
「総合的な学習の時間」の実施に向けて ~「総合的な学習の時間」完全実施直前レポート(小・中学校)	
指導と評価シリーズ.....	4 ~ 9
・小学校算数科「子どもの表現活動を活かした立体図形の指導」	
・中学校技術・家庭科「マルチメディアの活用についての実践」	
・高等学校理科(化学)「日常生活と関係の深い高分子化合物の指導」	
校内研究.....	10
・鹿島市立浜小学校	
・嬉野町立嬉野中学校	
佐賀再発見シリーズ.....	11
佐賀県立美術館と学校との連携	
インフォメーション.....	12
・平成13年度長期研修生の紹介	
・購入図書のご案内	

巻頭言

センス・オブ・プロポーション

佐賀県教育センター研修一課長
北島 義寿



「センス・オブ・プロポーション」 重要なこととそうでないことを識別する感覚のことです。今、私たちは膨大な知識に囲まれ、さらに、国際化した情報に振り回されている感があります。知識が増え、情報の範囲が拡大するのは一面では好ましいことではありますが、それが逆に自身のありようを不確かなものにしてしまっています。昨今の様々な社会問題の原因の一端は、このあたりにあるのではないのでしょうか。知識や情報というものに対する「軽重感覚」「大局観」を今こそ磨く時ではないかと思われます。

教育界の現状も、新しい価値基準を模索しつつ揺れ動いています。そして、生徒の規範意識の薄れや学力低下が問題視されて既に久しくなります。しかし、私たち教職に携わる者が一番大事にしなければならないのは、目の前の児童生徒であり、彼ら一人一人の本質をよく観ることです。そうすれば、案外昔と変わらない子どもの姿を見出すことができます。私たちは、単なる情報や知識に浮き足立つのではなく、目の前の子どもたちにきめ細やかな目を向けねばなりません。また子どもたちに、身近な、直接にかかわり合える人たちとのコミュニケーションの面白さを伝えたいものです。ここから出発して「軽重感覚」で世の中を見ていけば、地に足の着いた子どもや大人が増えてくるのではないのでしょうか。

本教育センターは、児童生徒の教育に懸命に取り組まれている先生方の情報交換の場であり、新しい教育理論の学習の場でもあります。将来を担う子どもたちに、よりよい教育を行うため、まず先生方同士が同じ場で研鑽を深め、それが現場でさらに生かされていくことを期待しています。

今年度も、本教育センターが企画した種々の研修講座等には、多くの先生方の参加をいただきました。来年度もさらに検討を加え、より実りのある研修計画を提示していきたいと思ひます。是非、積極的に御参加いただき、日々の教育活動に役立てて下さい。さらに、「センス・オブ・プロポーション」に磨きがかかれば幸いです。

特集:「総合的な学習の時間」の実施に向けて

-「総合的な学習の時間」完全実施直前レポート(小・中学校)-

平成13年度「総合的な学習」研究部会 小学校・中学校研究委員会

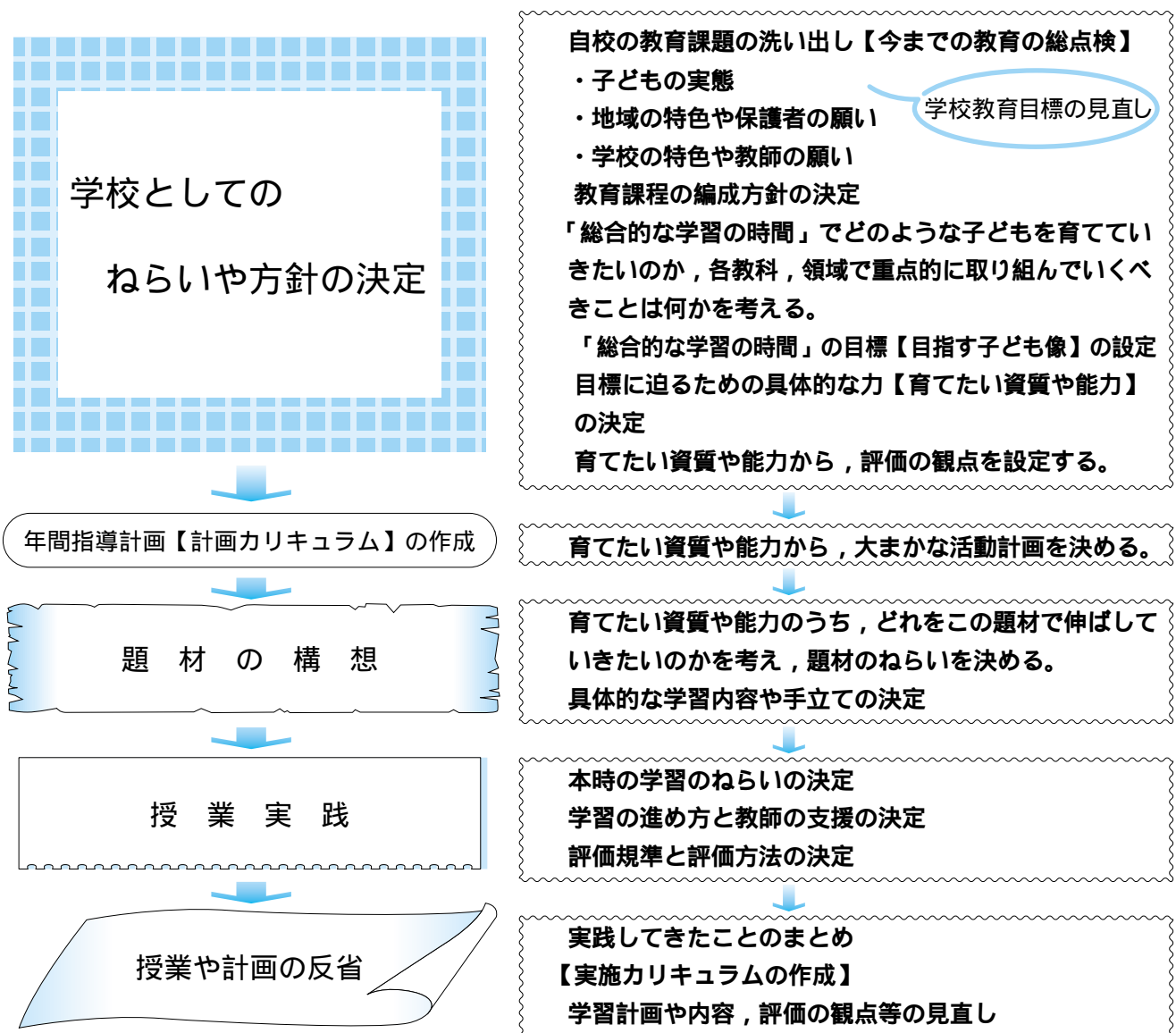
1 はじめに

来年度からの「総合的な学習の時間」の全面実施を目前に控えた今、この時間の趣旨やねらいに立ち返り、各学校の実践を振り返る中で、配慮すべき点を考えてみることにします。すべての学校において、事前に共通理解をしておく必要があるのは、特に、次の2つのことではないでしょうか。

教育課程編成上での「総合的な学習の時間」の位置付け
「総合的な学習の時間」を通して、育てたい資質や能力

このことを踏まえ、「総合的な学習の時間」の進め方をまとめると、次のようになります。

2 「総合的な学習の時間」の進め方



3 教育センターの講座等で、質問が多い中から、Q & Aの方式で「総合的な学習の時間」の進め方に沿って具体的に考えてみることにしましょう

Q1：まず、学校で何から取り組めばよいでしょうか？

「総合的な学習の時間」は、各学校が地域や学校、子どもの実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心にまで高めていく学習など創意工夫を生かした教育活動を行う時間として創設されたものです。まず、各学校で今までの教育の総点検をすることが求められます。つまり、全教職員で地域や学校、子どもの実態等を踏まえて学校の教育課題を洗い出し、「総合的な学習の時間」の目標や各教科、領域の重点目標を決めていくことが必要です。

Q2：育てたい資質や能力をどのように考えたらよいでしょうか？

「総合的な学習の時間」の目標【目指す子ども像】に迫るためには、どのような力を身に付けさせる必要があるのかを十分に検討し、設定することが大切です。例えば「主体的に判断し、行動する子ども」という目標を設定した場合、育てたい資質や能力として、「課題を見付ける力、見通しをもち計画を立てる力」などが考えられます。また、このような力を確実に付けていくためには、これまでの指導方法を見直し、教師集団の力量を高めていくなど、教師の指導力の再構成が求められます。

Q3：「総合的な学習の時間」の年間指導計画は、どのようにすればよいでしょうか？

「総合的な学習の時間」で育てたい資質や能力が決まれば、その目標を達成するには、年間を通してどのような学習がふさわしいかを考えることから始める必要があります。年間指導計画は、あくまでも目安であるため、児童生徒の活動の状況によっては変更もあり得ます。

Q4：「総合的な学習の時間」で題材を考える上で重要なことは何でしょうか？

その題材を通して、育てたい資質や能力を伸ばしていくことができるのかどうかという視点から検討することが大切です。また、子どもの問題意識や興味・関心に基づき選択・設定できるようにすることが望まれます。教師側の押しつけにならないよう配慮することが大切です。

Q5：「総合的な学習の時間」で、評価をどのように考えていけばよいでしょうか？

もっとも重要なことは、育てたい資質や能力から評価の観点を設定するということです。そして、評価の観点（題材のねらい）を児童・生徒の目標に置き換えて、前もって子どもたちに自覚させておくことも必要です。また、教師側で設定した評価の観点に加えて、子どもたちに1つか2つの児童・生徒の目標を決めさせることも考えていく必要があるでしょう。つまり、子ども自身が、この題材を通して自分の成長に気付くような評価が必要なのです。

Q6：特別活動と「総合的な学習の時間」の違いをどのように考えたらよいでしょうか？

教育課程の中に学校の教育目標の実現を目指すための指導内容として、特別活動や「総合的な学習の時間」があります。それぞれの学習を通して子どもたちに「どのような力を育てるか」というねらいが明らかに違います。つまり、ねらいから考えると、集団の力を高める特別活動、個人の力を高める「総合的な学習の時間」と言えるでしょう。したがって、特別活動の特質である「望ましい集団活動」と「総合的な学習の時間」の体験活動を区別しておく必要があります。安易に学校行事を「総合的な学習の時間」に置き換えてはいけません。また、学習形態から考えると、学級やグループで追究していく特別活動、個人で追究していくことが望ましい「総合的な学習の時間」となります。

4 おわりに

残り2か月間で、学校としてのねらいや方針の見直しをして、来年度の始まりが円滑に進むようにしておく必要があります。「木を見て森を見ず」という言葉がありますが、内容ばかりに目がいき、最も大切なねらいを見落としてしまうということにならないよう心掛けなければなりません。内容、手立て、評価の観点などすべて育てたい資質や能力から考えていくことが重要です。

県教育センターでは、できる限り各学校の取組に対して援助していきたいと考えております。「総合的な学習の時間」に関する情報など遠慮なくお尋ねください。

子どもの表現活動を活かした立体図形の指導



所員 稲富 博茂

1 はじめに

立体図形の指導で重要なねらいは、基本的な立体図形の概念形成です。基本的な立体図形（以下は立体図形）の概念形成では、身の回りにある様々な具体物を観察して、色、大きさ、材質などの属性を除外し、形のみに着目して「箱の形、筒の形、ボールの形」などへ、さらに「直方体、円柱、球」など用語で表された概念へ抽象化される過程が重要になります。

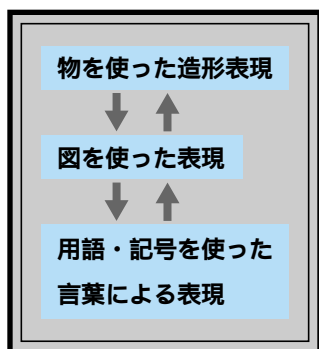
本稿では、立体図形の概念形成の過程において、子どもの表現活動に焦点を当てた事例を紹介します。

2 表現活動について

子どもは日常生活を通して身の回りの事物・事象について感覚的・直観的な立体図形の概念をもっています。しかし、経験的にもっている立体図形の概念は意識的でない場合が多いので、それをはっきりと意識の対象とすることが大切です。

そのためには、立体図形について、どんな情報がそこに含まれているのかを子どもが探り、それを伝えたり受け取ったりする手立てが必要になります。

そこで、「物を使った造形表現」「図を使った表現」「用語・記号を使った言葉による表現」の3つの表現活動を取り入れて、立体図形を表現する学習活動を重視しました。また「表現したことをよむこと」も取り入れて、3つを相互に関連させることも試みました。



3 表現活動の具体例

(1) 物を使った造形表現

直方体や立方体などの基本的な立体図形やそれらを組み合わせて形を作る活動です。

立体図形は、箱や積み木の面を写し取って、それを組み合わせたり、展開図をかいて組み立てた

りして作ります。そのとき、作ろうとする立体図形の各面の形と大きさを正確にかき表して、面と面とのつながり具合を理解することが必要です。

また、ひごと粘土で立体図形を作り（図1）、辺と辺との位置関係などをとらえさせることもできます。

立体図形を組み合わせて形を作る活動とは、箱を組み合わせて子どもが作りたいものを形にしたり、同じものを組み合わせたり（図2）する活動などがあります。

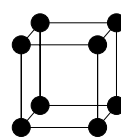


図1

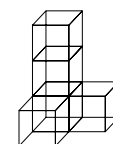
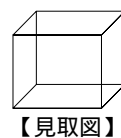


図2

(2) 図を使った表現

図で表す活動の中心となるのは、見取図と展開図です。

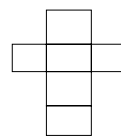
見取図は、立体の全体の形が見て取れるような図です。平行な辺は平行に、平行で長さが等しい辺は等しい長さで表すことに留意します。



【見取図】

展開図は、立体を辺などに沿って切り開いて一平面上に表した図です。展開図を見て、辺と辺との対応や面と面との位置関係などがよみとれるようになります。

立体を図で表すことは、三次元のを二次元に表すことになるので、立体のもつ性質や関係をすべて保つようにはかけません。したがって、図に直接には表れてこない性質や関係をよみとることも大切です。



【展開図】

(3) 用語・記号を使った言葉による表現

立体の名称、構成要素、性質、構成要素の位置関係を用語・記号を使って表す活動です。用語・記号から、それによって表される概念やイメージが伴うようにすることも大切です。

立体図形を言葉によって表現するには、以下のような用語・記号を使える必要があります。

辺	頂点	面	平行	垂直	立方体	直方体
角柱	円柱	平面	曲面	底面	側面	球

4 指導の実際

単元「直方体と立方体」における実践例を紹介します。

(1) 見取図

最初からかき方を指導するのではなく、まず、直方体（箱や積み木）を観察して、図で表す活動から入ります。

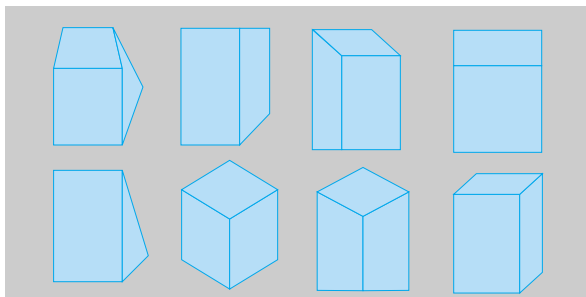


図3 子どもが表した図の実際

次に、子どもが表したいろいろな図を基に、最もよく表している図はどれか検討するようにします。その中で、その図が、直方体のどんな性質を取り入れているか、図と対応させながら説明させます。すると、「辺と辺が平行になっていて、その辺の長さは等しい」など、用語を使った表現が出てきます。それらを基に、見取図として表す場合の留意点をまとめます。

このように、直方体を図で表現し、それからよみとったことを基に検討していくことで、図による表現と用語・記号を使った言葉による表現を結び付けて考えることができます。

(2) 立方体

立方体の展開図が11通りあることを基にした事例を3つ紹介します。

ア さいころビンゴゲーム

普通のビンゴゲームは、縦、横、斜めのいずれかに並べばよいですが、このゲームでは6つの面が立方体の展開図になるとビンゴとなるようにします（図4）。

ゲームの手順としては、まず、縦5、横5の方眼に各自が1から25までの数を好きなところに1つずつ入れます。

そして、1人ずつ数を選んで言い、その数を自分のカードの中から探して印を付けていきます。

自分が印を付けたところが立方体になるかどうか、実際に組み立てて確かめる場を設定して

14	20	15	3	4
23	1	21	9	22
6	24	11	5	18
13	16	2	17	12
7	25	8	10	19

図4

おくと、展開図で表したこととの結び付きを考えることができます。

イ 自分だけの立方体の展開図をつくらう

立方体は、辺のところで切って開くと11通りの展開図をつくることができますが、面の部分を切るといろいろな展開図をつくるができます。

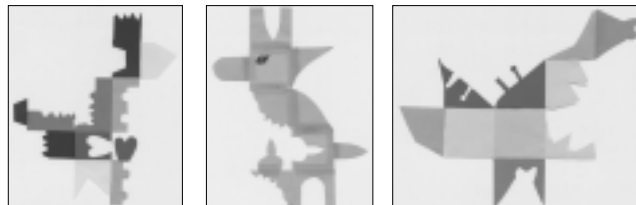


図5 子どもがつくった展開図の実際

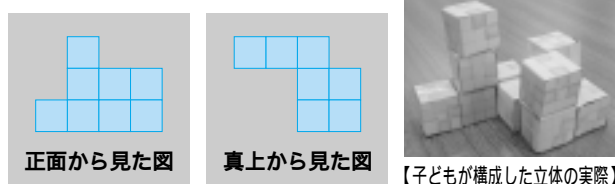
子どもは、何度も立方体に組み立てたり展開図に開いたりしながら、展開図のどこどこが組み立てたときに対応するのか探りながら取り組みます。

ウ 11個の立方体を積み重ねてみよう

立方体の展開図が11通りあることを見だし、それを組み立てた後にできる11個の立方体を利用します。

まず、教師が立方体を積み上げて、ある立体を構成します。そして、子どもの希望に応じて、正面から見た図や真上から見た図を提示し、それに合った形を子どもが構成していくようにします。

子どもは、正面と真上から見た図からでも、いろいろな立体が構成できることを見いだします。また、教師が構成した立体と同じものをつくるには、見取図が必要なことに気付く子どももいます。



5 おわりに

表現活動を活かすには、子どもの感覚で表現している微妙な表現を受け入れて評価をしていく教師の態度も大切なことの一つです。

参考文献：

- (1) 文部省『小学校学習指導要領解説算数編』1999 東洋館出版社
- (2) 狭間節子編『小学校算数実践指導全集7』1995 日本教育図書センター
- (3) 赤井利行『空間観念の育成に向けて』1997 学校教育研究会

「情報とコンピュータ」領域における マルチメディアの活用についての実践

所員 柴田 康彦



1 はじめに

新学習指導要領の中学校技術・家庭科の技術分野においては領域が整理され「技術とものづくり」と「情報とコンピュータ」の2領域構成となりました。さらに、「マルチメディアの活用について」の事項が新しく加えられました。

本実践ではこの2つの領域の融合を図り、第3学年を対象に「マルチメディアの活用について」の指導の中で、生徒に「技術とものづくり」領域のWebページを作成、発信させ、他の学校との情報交換ができるよう指導していきたいと考えました。その際、インターネットの有用性（広域性、即時性、同時・双方向性）にも注目したいと思います。

2 技術・家庭科指導計画(大和町立大和中学校)

マルチメディアの活用について(全10時間)

- (1) 情報モラルについて 1時間
- (2) マルチメディアを活用した情報 1時間
- (3) マルチメディアの利用の仕方 1時間
- (4) Webページの作成・発信 6時間
- (5) これからの情報活用 1時間

3 授業実践

指導計画(4)Webページの作成・発信(6時間)の項目の授業実践を詳しく説明したいと思います。

マルチメディアを利用した情報処理の手順を図1に示します。

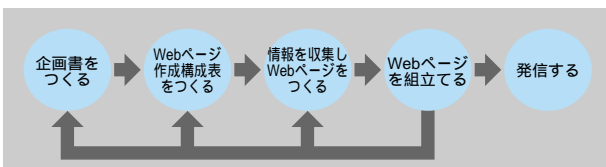


図1 マルチメディアを利用した情報処理の手順

(1) 企画書づくり(0.5時間)

Webページの作成は生徒たちにとって初めてであり、少ない授業時間を考慮し、既習の学習内容である木製品の製作の作業計画表を題材に挙げました(図2)。

工程	作業内容	工具・機材など
材料取り	①けがき	さしがね・直角定規
	②のこぎりひき	両刃のこぎり・開突のこぎり・糸のこ盤
部品加工	①かんざしやすり	かんざし・木工やすり
	②検査	直角定規
組立	①仮組立	
	②けがき	さしがね
	③下穴あけ	四つ目ざり・卓上ボール盤
	④接着剤を塗る	木工用ボンデ
	⑤釘打ち	げんこのう
塗装	①下塗り	紙やすり
	②塗装	塗装用具など

図2 木製品製作の作業計画表

(2) Webページの作成構成表づくり(0.5時間)

各工程の内容を分かりやすく整理し、見やすく構成させるために、企画したことをワークシートにまとめさせました。内容のつながりや提示順序を考えることで、見る人が理解しやすいページにすることを心掛けさせました。

(3) 1年生との交流を図った素材・情報収集及びWebページ作り(3時間)

Webページの作成(写真1)はホームページ作成ソフトを使い、ワープロ感覚で文字入力ができるようにしました。レイアウトなどの微妙な調整は、生徒が必要としたときにソース(HTML)の書き換えで対応できることを指導しました。各工程のWebページの情報収集(写真・動画)は1年生の技術の時間に合わせ取材を行わせました(写真2)。

各工程で使用する工具や機械の写真をデジタルカメラで撮影したり、作業の様子をビデオカメラで記録させました。また、それだけでなく、自分

たちが既習した学習内容を復習した上で、作業上の技術的な指導を行うことで、下級生との交流を図りました。



写真1 生徒による Web ページ作成



写真2 のこぎりびきの動画撮影

Web ページ作成と情報収集に関しては、著作権や個人の肖像権について、事前に学習したことに十分留意するように指導しました。

(4) Web ページの組立 (1 時間)

各工程別 (材料取り・部品加工・組立・塗装) の Web ページ (図 3) をトップページからリンクさせ、Web ページの組立を行いました。見やすくするための機能として次の工程を簡単に閲覧できるようにボタンを設置させました。また、各工程で使用する工具等の写真もリンクさせました。また、(3)で収集した動画は AVI ファイルなのですが、容量が大きすぎるため、Web 用に WMV ファイルに変換し作業の様子動画をリンクさせました。



図3 「のこぎりびき」のページ

(5) 情報の発信 (1 時間)

今回作成した Web ページを大和中学校のホームページにアップし、他校との情報の交換を行いました。技術・家庭科の「技術とものづくり」領域の授業の時間に、この Web ページを製作作業の参考にしてもらいました。また、その感想を電子メール (図 4) で送ってもらい、今後の Web ページの更新に生かせるよう指導しました。

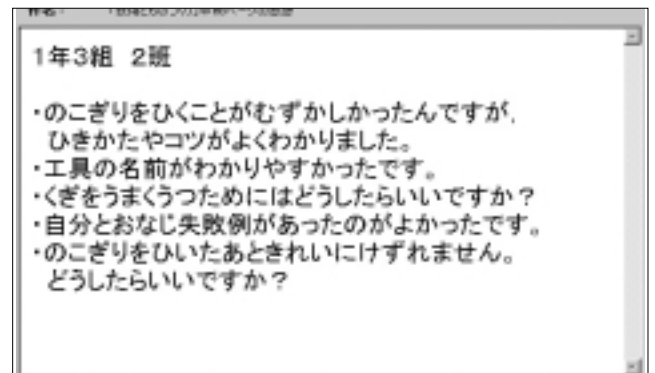


図4 他校からの感想メール

4 研究のまとめ

今回の授業実践では、「技術とものづくり」の Web ページ作成を通し、既習の学習内容を一層定着させると同時に、マルチメディアに対しての理解を体験的に深めさせることができました。授業後の生徒の自己評価から、「Web ページの企画はうまくいったけれど、思うようなページが作れなかった」「画像などの効果的な使い方ができなかった」などの問題点も少なくありませんでした。また、生徒の下位行動目標なども今後の課題であると考えています。

これからは、生徒の身近な情報を題材にして、問題解決的な学習活動に重点を置いて、マルチメディアの活用の学習指導に取り組みたいと考えています。

日常生活と関係の深い高分子化合物の指導

～プラスチックに関する指導の工夫～



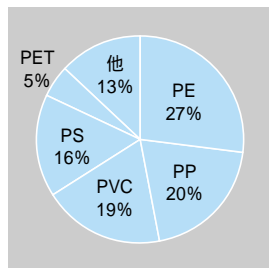
所員 蒲原 正憲

1 はじめに

化学の授業において、生徒は様々な物質及びそれに関連する現象などを学習します。しかしながら、日常生活との関連付けができていないのではと思うことがこれまでも多々あり、日常生活の中の化学を強く意識付けさせる必要があると感じています。また、ダイオキシンや環境ホルモンなどに代表されるように、化学物質の悪い点ばかりが強調されがちですが、その問題を解決し豊かな生活を保障するのも化学の知識と技術であることを生徒に理解させることが大切であると思います。

2 最近のプラスチックの現状と諸問題

日本のプラスチック生産量（約1500万トン）はアメリカに次いで世界第2位であり、生産している約70種の大部分が成形加工の簡単な熱可塑性樹脂として生産されています。日常使っている身近なプラスチック製品のほとんどは、五大汎用樹脂と呼ばれるもので、ポリエチレン(PE)、ポリプロピレン(PP)、ポリ塩化ビニル(PVC)、ポリスチレン(PS)、ポリエチレンテレフタレート(PET)からできています。最近ではリサイクル推進のため材質表示がなされているので、長期休業中の調査学習として取り組ませてもよいと思います。

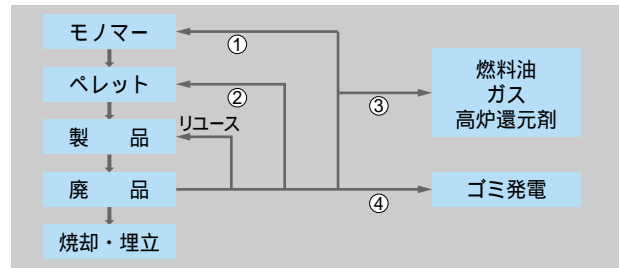


熱可塑性樹脂の生産割合

プラスチック製品は、各々の樹脂がもつ透明性や耐熱性などの特徴を十分に活用していますが、付加価値を付けるために、単一樹脂ではなく複合樹脂とし、可塑剤などの添加剤を加えているためリサイクルが難しくなっています。また、添加剤であるフタル酸エステルなどの環境ホルモンやPVC製品を低温燃焼させたときに発生するダイオキシンなどが環境問題としてクローズアップされており、その解決策が検討、試行されています。

3 プラスチックのリサイクルと課題

現在、廃プラスチックの約3割が次図で示す～の方法によりリサイクルされています。はケミカルリサイクル、はマテリアルリサイクル、はフューエルリサイクル、はサーマルリサイクルと呼ばれています。



プラスチックのリサイクル

最も高品質の製品が再生できるのは、のケミカルリサイクルですが、これが可能なのは6-ナイロン、6-ナイロン、ポリスチレン、ポリメタクリル酸メチルの4つだけです。のマテリアルリサイクルとしては、SONYが開発した発泡スチロールのリサイクルシステムが有名です。のフューエルリサイクルでは、近年増加している廃パソコンのケースなどの難燃化プラスチックを油化する技術開発に期待が寄せられています。のサーマルリサイクルでは、現在56万kW（中型の火力発電所1基分）の発電を行っています。

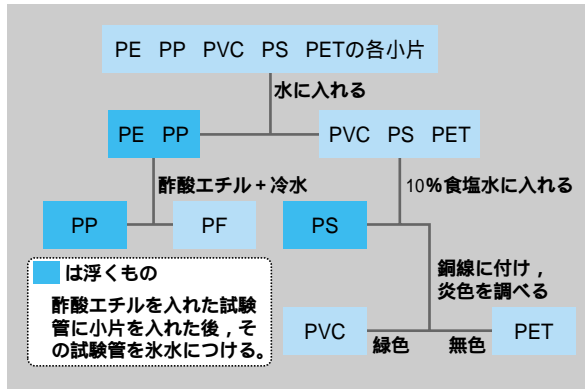
近年、プラスチックリサイクルの技術開発が盛んに行われていますが、複合プラスチックの増加にその技術開発が追いつかないのが現状です。また、再生品の価格が新品価格よりかなり高価（2～48倍）であり、循環型社会を目指すためにもその政策的対応が待たれています。その一方で、地球環境に優しい生分解性プラスチックの開発が進められており、製品化も順次行われています。

4 プラスチックに関する実験例

(1) プラスチックの識別実験

生徒実験では五大汎用樹脂を扱えばよいと思います。次図の基本実験を行い、燃焼の様子を観察

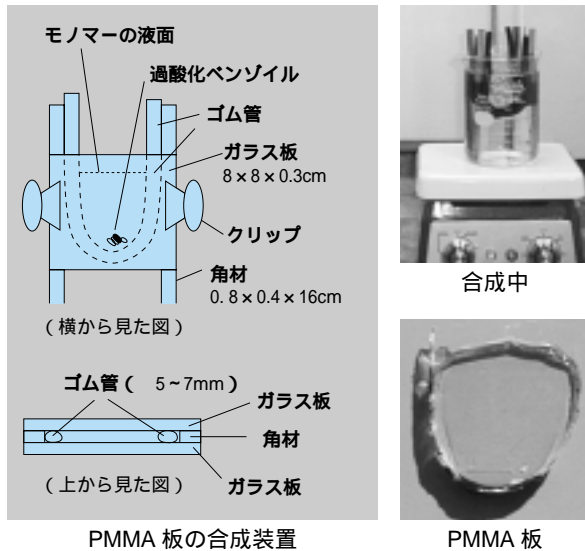
させた後、生徒が持ち寄ったものを調べると更に理解が深まると思います。



五大汎用樹脂の識別実験

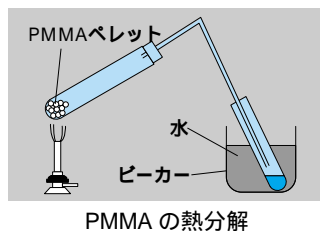
(2) プラスチックの合成実験

ケミカルリサイクルに最も適しているポリメタクリル酸メチル (PMMA) に注目し、合成から成形加工までができる次図のような装置を考案し、PMMA板を作る実験教材を開発しました。PMMA板は透明度がNo.1の有機ガラスであり、看板や自動販売機のショーケースなど幅広く利用されています。PMMA板の制作では、実験の途中で放置しておく時間がありますので、アニリン樹脂の合成など短時間でできる合成実験を取り入れることにより、付加重合だけではなく縮合重合反応の観察をさせることで、より理解を深めることができます。



(3) プラスチックのリサイクル実験

ケミカルリサイクルの例として、市販のPMMAのペレットを熱分解してモノマーを得る実験が簡単に行えます。このモノマーを(2)の装置で再度合成するとより理解が深まると思います。マテリアルリサイクルの例と



しては、発泡スチロールをリモネンで溶かした後、放置することによりフィルム化する実験、アセトンで溶かしてペースト状にしたものを蒸し器で蒸して発泡させる実験などがあります。

5 プラスチックの指導例と実際

第1時	プラスチックの概要について ・分類とその例 ・実物サンプルの確認 プラスチックの識別実験
第2時	プラスチックの合成について ・合成法と加工法 PMMA板及びアニリン樹脂の合成
第3時	プラスチックのリサイクルについて ・ゴミ問題等の現状 ・リサイクルと課題及び展望 マテリアルリサイクルの実験 ケミカルリサイクルの実験

授業前に、プラスチックに関する知識やイメージを生徒たちに聞いたところ、「プラスチックという物質からできているもの」「ダイオキシンなどを発生する悪いもの」などといった漠然とした答えが返ってきました。しかし、授業後の感想からは、日常生活でのプラスチックの多さに驚き、その合成やリサイクルだけではなく、環境問題にも化学が貢献していることをよく理解できたようです。また、制作したPMMA板にはかなり満足していました。



授業風景

(生徒の感想文からの一部抜粋)

私たちが学んでいる化学と環境問題がこんなにも密接に関係しているとは驚きました。この授業を通して、化学と身の回りのものを結び付けて考えられるようになると思いました。

6 おわりに

プラスチックに関する情勢は日々変化しているため、生徒によるインターネット等を利用した調査学習を組み込むと更に理解が深まると思います。実験を中心に授業を進めたり、調査(実験)報告書を提出させることにより、ペーパーテストでは計れない関心・意欲・態度、実験技術や技能・観察力が評価できました。

なお、ここに掲載した実験教材に関する詳細は教育センターまでお問い合わせください。

校内研究

～我が校の取組～

運動の楽しさを求めて 生き生きと活動する 子どもの育成

鹿島市立浜小学校 校長 山田 典明

本校は、平成11・12・13年度の3年間、文部科学省より「体育・スポーツ推進校」の指定を受け、研究実践に励んできた。10月26日に研究の一端を発表した。

新学習指導要領では体育科の目標は、「心と体を一体として捉え、適切な運動の経験と健康安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」と改定された。

本校では、「運動の楽しさを求めて生き生きと活動する子どもの育成」という研究主題のもと、すすんで運動に親しむ子ども（運動の自発性）、運動や遊びを通して豊かに友達と関わる子ども（運動の生活化）、心身の健康に気をつける子ども（健康への興味関心）を、めざす児童像とし、教科体育研究部、教科外体育研究部、健康教育研究部の三本柱で研究を進めてきた。

3年次になり、子どもたちが、自分のめあてを持って学習できるようになってきたことや、多くの子どもたちが、中庭や運動場で遊ぶようになってきたことが研究の成果の現われではないかと考える。



朝の「いきいきタイム」での遊び別活動

「個を生かし、生きる力を 育む指導法の研究」

- 新教育課程に対応した教科指導と
総合的な学習の運用を中心に -

嬉野町立嬉野中学校 校長 池田 修

本校では来年度より完全実施される新学習指導要領に対応するため、平成11年度より、総合的な学習の時間を実施してきた。

いよいよ移行期間の最終年度となる本年度は、前半に総合的な学習を中心に取り組んだ。1年は「郷土理解」、2年は「郷土理解から異文化理解」、3年では「環境・福祉・国際理解」と生徒の発達段階や学習の系統性を考慮した学年ごとの学習課題を設定した。そして、問題解決的な学習、調査活動、体験活動、表現活動などを取り入れた学習の在り方についての研究を進めてきた。

後半は新学習指導要領に対応するために、各教科や道徳、特別活動、総合的な学習のカリキュラム作成の研究を進めている。特に、本校教育の主な目標である「基礎学力の確実な定着と個に応じた学力の伸長をはかる」の具現化を目指して、数学、英語、理科において基礎・基本の定着を図るための少人数授業、TTなどの指導方法の改善や指導の系統化・効率化を図るための小中連携などに取り組んでいる。



第2学年長崎自主研修のようす

佐賀県立美術館と学校との連携

所員 増本 淳子



欧米の美術館・博物館を訪れた折、世界的名画の前に座り、学芸員や教職員の説明を受けている子どもたちの姿をよく目にします。欧米では、幼児期から美術館に連れて行き古今の素晴らしい芸術作品に親しませる教育を重視しています。芸術作品の鑑賞は、老若男女を問わず人間の心や精神の形成に重要な働きをもっていると言われているからです。

日本でも、来年度から実施される新学習指導要領の小学校図画工作科並びに中学校美術科においては、美術館等の施設を積極的に活用することが示され、高等学校芸術においても同様な方向が示されています。

佐賀県においては、県立美術館、県立博物館等の文化施設があります。佐賀県立美術館には、日本近代美術を中心に、本県ゆかりの作家の作品が多く収集されています。なかでも、県立美術館を他に際立たせるものは、日本近代洋画史におけるアカデミズムの系譜に連なる作家たちです。それは、百武兼行（1842～1884 佐賀市片田江出身「バーナード城下絵」他）、小代為重（1861～1951 佐賀市赤松町出身「少女像」他）、久米圭一郎（1866～1934 佐賀市八幡小路出身「京都加茂川の景」他）、岡田三郎助（1869～1939 佐賀市八幡小路出身「矢調べ」他）、高木背水（1877～1943 佐賀市松原町出身「箱根街道」他）などです。こうした近代洋画の先駆者たちをはじめ、現代にいたる作家たちの作品が多数所蔵されています。

そういった所蔵作品を、美術館と学校が連携を図り、連絡を密に取りながら、コンピュータや情報通信ネットワークを活用したり、巡回展等を通したりして鑑賞させることもできます。このような活動を通して、子どもの学習への関心・意欲や鑑賞の能力を高め、ひいては生涯にわたり美術鑑賞を愛好していく素地を育成することが必要だと考えられます。

秋の巡回展の折りに、子どもたちが一番心惹かれた作品として選んだのは、武藤辰平の「虹」という作品です。これらの作品を鑑賞する中で、子どもたちは今度は実際に美術館に行ってもっとたくさんの作品を見たいと書いていました。こういった子どもたちの気持ちを大切にしていきたいものです。

今後は、心豊かな児童生徒を育てるためにも、美術科の授業だけでなく、「総合的な学習の時間」や学校教育全般で、地域の美術館や博物館等の文化施設を積極的に活用していく必要があるのではないのでしょうか。



佐賀県立美術館（佐賀市内）

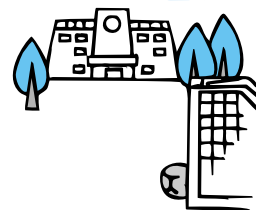


武藤辰平（1894～1965 佐賀市材木町出身）「虹」



佐賀県立美術館巡回展（東松浦郡玄海町）

I N F O R M A T I O N



平成13年度長期研修生の紹介

今年度は、下の表に示す先生方が、各研究領域で教育実践上の諸問題について研究を進めています。本教育センターにおいて、平成14年3月19日(火)、20日(水)に成果発表会を実施する予定です。多数の御参加をお待ちしております。

氏名	所属校	研究領域	研究主題
田上 祐正	鳥栖工高	工業	環境に配慮できる知識・技術を身に付けた工業技術者の育成を目指した、工業高校における環境教育の在り方の研究
大川内 加代子	能古見小	国語	豊かな心で意欲的につづる子どもを育てる学習指導方法の研究
野方 弘道	若木小	社会	身近な社会的事象に共感し、地域の未来を追究してゆく子どもが育つ社会科学習
大町 直也	七浦小	社会	社会認識を深めさせる社会科学習指導方法の研究
遠藤 浩幸	本庄小	算数	筋道を立てて考える力を育てる算数科学習指導方法の研究
北川 隆徳	立花小	算数	主体的に問題を解決する子どもを育てる算数科学習指導方法の研究
馬郡 弘貴	兵庫小	理科	主体的に自然事象を追究し、確かな学力を身に付ける理科学習指導方法の研究
天野 雄二	鳥栖小	理科	自ら学び、自ら考える課題選択学習の指導方法の研究
江島 孝浩	神野小	生活	人とかがわるよさに気付く生活科学習支援の在り方についての研究
川橋 誠信	厳木小	学級経営	好ましい人間関係を育てるための学級づくりの研究
牟田 速	佐志小	道徳	体験活動を生かし、価値の内面化を図る道徳の時間の創造を目指して
熊谷 すき子	鍋島小	教育相談	保健室と養護教諭の特性を生かした相談活動の在り方に関する研究
福島 隆	中原小	総合的な学習	地域交流を中心とした総合的な学習の進め方についての研究
千綿 和也	六角小	総合的な学習	生きる力をはぐくむ総合的な学習の評価の研究
馬場 司	三瀬中	社会	問題解決能力を育てる社会科学習指導方法の研究
八田 真一郎	嬉野中	数学	論理的な思考力を育成する学習指導方法に関する研究
大串 由紀子	城西中	教育相談	養護教諭の特性や保健室の機能を生かした健康相談活動の在り方に関する研究
大野 誠	大良中	教育相談	学校の中で効果的に機能する教育相談の在り方に関する研究
田原 優子	中央中	総合的な学習	豊かな心をはぐくむ総合的な学習の研究
坂井 謙太	伊万里中	総合的な学習	地域の人々に学び、自己の生き方を考える総合的な学習の研究
田中 幹生	佐賀東高	理科	科学的に探究する能力をはぐくむ化学教材の開発
梅崎 久徳	厳木高	情報	教科「情報」の効果的な学習指導方法についての研究
岩瀬 真智子	大和養護	特殊教育	子どものコミュニケーションの実態に応じた教師のかかり方についての研究
内山 須磨子	ろう学校	特殊教育	聴覚障害児教育の最早期教育に関する研究

購入図書の御案内

教育センターでは、平成13年度に新しく181冊の図書を購入しました。総合的な学習や教科の評価基準といった今日的な課題の内容のものも取りそろえています。その一部を紹介します。また、これまで購入したビデオテープが84本、e! ネットで録画したものも多数あります。今年度、教育相談体験学習講座で実施した「構成的グループエンカウンター」の理論や実践のテープも充実させています。貸し出しも行っていますので活用してください。

なお、教育センターのホームページからの検索もできます。

総合的な学習のカリキュラム	大阪教育大学附属平野小学校
総合的な学習の実践例と解説	第一法規出版
総合的な学習へのアプローチ(全3巻)	上杉 賢士著
学び方の基礎・基本と総合的な学習	柴田 義松著
学び方を学ぶ(小学校3巻・中学校1巻)	柴田 義松著
学校の評価活動～学校と子供の新しい評価～	佐野 金吾著
小学校各学年の絶対評価基準(全6巻)	小島 宏・真崎 千秋共著

